島根大学広報誌 広報しまだい
# Shimadai
SHIMANE University
2015.1 vol.23

## 現代に蘇る古代出雲

【学長スペシャル対談】出雲大社権宮司 千家 和比古さん

特集■活躍する卒業生

学生時代の豊かな経験が、将来の進む道に生きてくる

児童文学作家 那須 正幹さん

学長
スペシャル対談

撮影協力／出雲大社・看雲楼

出雲大社権宮司
# 千家和比古さん×小林祥泰
島根大学 学長

SENGE YOSHIHIKO　KOBAYASHI SHOTAI

千家和比古さん（右）/1950年生まれ、島根県出雲市出身。國學院大學大学院文学研究科修士課程（日本史考古学専攻）修了。國學院高等学校教諭を経て、85年から出雲大社に奉職。現在、権宮司。共著に『古代を考える 出雲』（吉川弘文館）、『出雲大社 日本の神祭りの源流』（柊風舎）、『古代出雲と風土記世界』（河出書房新社）、論考に「高屋神殿をめぐる象徴性」などがある。3月8日に大阪国際会議場で開かれる『古代出雲文化フォーラムⅢ/「くにびき神話」と古代出雲・伯耆の成り立ち』にも参加される。


■島根大学の研究・地域貢献事業紹介
①法文学部 小林 准士教授 …… 9
②医学部 木下 芳一教授 …… 11
■COC事業レポート …… 13
■しまだいトピックス …… 15
■しまだいNEWS …… 17
タマサート大学医学部教員が附属病院訪問
附属中学校コーラス部が全国大会に5年連続出場
■海を越えた島大生 …… 19
■シリーズ企画　総合医を目指して …… 20
■キャンパスチェック …… 21
■学生プレス研究会 …… 23
■サークル紹介 …… 25
総合文芸部／ソフトテニス部
■島根スサノオマジック紹介・
島根大学支援基金寄附者一覧・プレゼント …… 26

# 現代に蘇る古代出雲

ゲストは、出雲大社権宮司を務め、出雲の歴史や文化の研究家でもある千家和比古さん。趣味は古代史という小林学長と、島根大学と出雲大社のご縁から、「くにびきジオパークプロジェクトセンター」の目指すものまで、出雲をキーワードに深く語り合う対談となりました。

## 古き良き日本の面影を再発見するためのヒントが出雲にはたくさんある

**学長**　出雲大社は縁結びの神様と言われますが、出雲大社と島根大学には様々な縁があります。まず、外国人で初めて昇殿参拝をしたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は当学の教育学部の前身、松江師範学校の教師でした。

**千家**　ハーンの妻、小泉セツは千家の縁戚筋にあたります。ハーンは八十一代国造千家尊紀（たかのり）と懇意で、出雲大社参詣を契機に、濃厚な交遊を結んでいます。

**学長**　ハーンは西欧化に邁進する明治時代の中、出雲大社に古き良き日本を再発見しました。バブル崩壊や東日本大震災を経て、私たちも経済至上主義の見直しを始めています。今、ハーンの温故知新の姿勢に学ぶ意味は大きく、この縁はますます深まっていくことでしょう。

もう一つの縁は、出雲大社の檜皮の炭を3500袋いただき、附属病院の特別個室の天井裏に使わせてもらっていることです。

**千家**　これは本当に良いご縁でした。遷宮により社殿の屋根から大量の檜皮が除去されるのですが、神様の住まいの構成物ですからゴミとして捨てるわけにはいきません。いろいろと活用法を思案していたところにお話があり、良い社会貢献ができたと喜んでいます。

2015.1 vol.23
Shimadai
島根大学広報誌
広報しまだい

■学長スペシャル対談
出雲大社権宮司　千家 和比古さん …… 1
■〈特集1〉活躍する卒業生
児童文学作家　那須 正幹さん …… 5
■〈特集2〉島根大学のいま
法人化10周年記念式典 …… 7
■〈特集3〉活躍する卒業生
プロフットボーラー　小倉 典子さん …… 8

# 聖地としての出雲大社の伝統は弥生時代から現代までまっすぐにつながる

**学長**　炭には優れた調湿、消臭効果があります。新病棟を作っている時に檜皮が炭になることを知り、ぜひ譲り受けたいと思いました。天井に檜皮を入れた個室は、壁面の出雲和紙と相まって、とても柔らかな雰囲気です。出雲大社パワーをいただき、癒しの環境を作ることができました。

**千家**　檜皮は御本殿、キサガイヒメノミコト（蚶貝比売命）とウムガイヒメノミコト（蛤貝比売命）が祀られている天前社（あまさきのやしろ）の屋根から取ったものでした。この天前社の女神は大国主神が大火傷を負われた時に治療した神様ですが、先生は「看護師の元祖」として教えられているそうですね。

**学長**　女神たちは赤貝と蛤で大国主神を救うのですが、キチンキトサンやタウリンを含んでおり、効能は実証されています。人工皮膚につながる高度な医療だといえるでしょう。

**千家**　平安時代に成立した日本最古の医学書「大同類聚方」（だいどうるいじゅほう）にある処方には出雲氏由縁など出雲関係のものが非常に多く、他地域にも出雲からの伝承とされる薬が少なくありません。古代から出雲に高度な医療があった証明になるかと思います。

**学長**　荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡を見ても、出雲には古代から発達した文化圏があったことが分かります。では、出雲大社の起源はどのくらいまで遡れるのでしょうか？

**千家**　これはなかなか難しい質問ですね。江戸時代前期に出雲大社を造営したおり、摂社の命主社（いのちぬしのやしろ）の背後から祭祀用の青銅戈とヒスイの勾玉が見つかっていますが、弥生時代に埋葬遺跡以外で勾玉と青銅器が一緒に出土した例はここしかありません。巨石の下から出土したこともあり、ここが祭祀の場所だったことは確かだと思われます。南側対岸の砂丘上には集団墓地の跡があるので、空間を挟んで聖地と墓地とがきちんと分かれていたようです。

**学長**　2000年の境内地の発掘調査で巨大な柱が出土し、平安時代に「雲太、和二、京三」と言われたように、出雲大社が東大寺大仏殿より高い48メートルもの高層建築だったことが証明されました。

**千家**　その発掘の際、滑石製臼玉やメノウ製勾玉など4世紀後半の祭祀遺物が発掘され、ここで神祭りが行われていたことが明らかになりました。こうした滑石製品は祭祀の道具として大和朝廷が全国に展開していたものですが、伊勢神宮ではこうした出土品は5世紀から遡らないようです。出雲大社のものは、時代的に早い。大和朝廷がいかに出雲大社を重要視していたかが分かります。巨大な柱と比べると実に微細なものですが、それ以上に重要な発見でした。

命主社の場合、巨石にお迎えしていた神様を、やがて巨石の前に小さな祠を立てて、人と同じように建物に住んでいただくようになり、そこで神祭りも継続的に行われていく。これらの出土品は出雲大社境内一帯の聖地の伝統が、弥生時代から現代までつながっている珍しいケースであることの証明になるかもしれません。

# くにびきは神話ではなく ダイナミックな地形の変動を 古代の人たちが語り伝えてきたもの

拝殿の注連縄の前で。歴史に神話に医学に、二人の話は尽きません。

**学長**　島根大学では、学外・学内から広く専門家をお呼びして出雲地域を総括的に探究する「出雲文化学」を開講しており、千家さんにもご登壇していただいています。貴重な文化遺産に恵まれた環境にあることは、島根大学の大きな強みです。グローバルな時代だからこそ、自分たちのいる場所の歴史や文化を知り、しっかりしたアイデンティティを持つことが大切だと思います。

**千家**　日本は歴史のある国なので、新しい国の人は特に興味を持つようですね。以前、娘がオーストラリアの学校で日本語の講義をしていた時、日本語のことよりも日本の歴史のことを突っ込んで質問されたようで、答えが不安で私に電話してきたことがあります。昔の高校時代の教科書程度の話ではダメ、と言ったのですが。

**学長**　本学では、「出雲風土記」に書かれている「くにびき神話」のエリアをジオパークにできないかと、「くにびきジオパークプロジェクトセンター」を開設して研究を進めています。ジオパークと言うと自然や景観に重点を置いたものが多いですが、もっとストーリー性のあるものにできたらと考えています。

**千家**　ネイチャーは「自然」の文字で訳されていますが、もともと被造物を表し、日本人の持つ自然観とは違います。出雲弁に残る"じねん"です。大地も人も生き物も作られた物質ではなくて、おのずからなる生命の営みを続ける存在だという発想が、日本人本来の自然観ではないでしょうか。私もジオパークに必要なのは、生命の営みとしてのストーリーだと思います。

**学長**　くにびきは単なる神話ではなく、島根半島が陸続きとなり、出雲平野や宍道湖、中海などが形成されていく地形学的変化を見ていた縄文人や弥生人の記憶が語り継がれて来たものだと思います。

**千家**　斐伊川の沖積作用で砂洲ができ、小島が点々と生まれ半島部との間が陸化されてくる。大地が誕生するエネルギー、それこそが"じねん"の力です。そしてくにびき神話は、新羅や越など、国の余りを鋤で刻み分け、河船を引っ張るようにして手繰り寄せ、出雲の国を作る物語として表現する。地形感覚の鋭さとともに、当時の農耕民と漁労民の労働賛歌のような、生活に密着した発想も感じます。

**学長**　3月に大阪で開催する「古代出雲文化フォーラムⅢ」のテーマは、『「くにびき神話」と古代出雲・伯耆の成り立ち』です。千家さんも参加されるので、地質学や考古学の専門家の方々と一緒にこのテーマをさらに深めることができたらと思います。本日はありがとうございました。

小林祥泰/1946年生まれ。出雲市出身。慶應義塾大学医学部卒業後、島根医科大学医学部教授、島根大学医学部附属病院長などを経て、2012年4月より島根大学長に就任。専門は神経内科学。趣味は古代史。

特集1 活躍する卒業生

「ズッコケ三人組シリーズ」作者

# 那須正幹（まさもと）さん

## 学生時代の豊かな経験が、将来の進む道に生きてくる

累計2,300万部以上を発行している「ズッコケ三人組シリーズ」等、児童文学を代表する作家那須正幹さんに、島根農科大学（1965年島根大学に編入、現 島根大学生物資源科学部）での学生生活や仕事に対する思いを伺いました。

那須正幹先生プロフィール

1942年、広島生まれ。1961年に島根農科大学林学科へ入学し、卒業後は東京で自動車のセールスマンに。1967年に退社した後、児童文学の執筆を始め、1978年に『それいけ！ズッコケ三人組』（ポプラ社）を発表。「ズッコケ三人組シリーズ」のほか、「海賊モーガンシリーズ」、『絵で読む広島の原爆』など作品多数。

### 松江の自然と温かい人たちに囲まれて過ごした大学生活

**■島根農科大学に入ったきっかけを教えてください**

小学校時代から昆虫採集が趣味で、島根農科大学に応用昆虫学があったことと、島根が両親の故郷で身近だったことが受験した理由です。大学では森林昆虫学を専攻し、卒論はマツを侵食する「マツノシンクイムシの天敵防除（薬剤を使わずに、天敵で害虫を防ぐ）」をテーマに研究をしました。

**■どんな学生生活でしたか？**

大学では山岳部に所属し、さまざまな山へ登っていました。大学時代で特に印象に残っていることは「三八豪雪」（昭和38年の記録的大豪雪）。大山寺の鳥居を跨ぐことができるくらいに雪が積もり、さすがに驚きました。4年間を自由に楽しく過ごすことができたのは、「松江（島根）の人情の厚さ」が大きいですね。住民の人たちが温かく、学生に対する寛容な空気があったから、のびのびと学生生活を送ることができました。

**■どのようにして児童文学作家の道へ歩まれたのですか？**

高校生のときから小説を書くことが好きで、新人賞に応募したりしていましたが、児童文学について考えたことはありませんでした。東京で就職し、2年間ほど自動車のセールスをしていたのですが、辞職して故郷の広島に戻ることに。父親の書道塾を手伝っているときに、たまたま姉から児童文学の同人誌の会に誘われて書き始め、28

本棚には50巻続いた「ズッコケ三人組シリーズ」がズラリ。

歳のときに『首なし地ぞうの宝』が学研児童文学賞に入選しました。児童文学で認められたのは、書道塾で多くの子どもたちと接していたのがよかったのかもしれません。

**■現在の活動について教えてください**

「ズッコケ中年三人組シリーズ」の10冊目となる『ズッコケ中年三人組age49』を執筆し終えたところです。「中年」はシリーズにするつもりはなかったのですが、age40のあとがきで、「10年後に50歳になった熟年三人組を書きます」と予告したら、10年も待てないという反応が多くて。編集者の勧めもあって、1年ごとに単行本を出すことにしました。今回はロマノフ家の隠し財産やルイ・シャルルの末裔など、歴史ロマンを軸に展開します。また、少年と戦争をテーマにした小説が平成27年に出版される予定です。

**■この仕事でやりがいを感じるのはどんなときですか？**

読者とキャッチボールができるところ。特に「ズッコケ三人組シリーズ」は1作目からは37年経っていますが、子どもたちだけでなく、何かのきっかけで大人の方から「ファンになった」という声を聞けるのはうれしいですね。それに、現代の日本では私たちの世代が最後の戦争体験者。私も3歳のときに被爆しています。原爆について一通り書いてきましたが、これからも義務として伝えていきたいです。

## 未来はわからないもの だから決めつけず、柔軟な思考を磨こう

**■学生に向けてメッセージやアドバイスをお願いします**

80年代と現代では子どもを取り巻く状況は大きく変化しています。前は「ズッコケ」の世界と現実がさほど乖離していませんでしたが、90年代からファンレターに「ケンカしても仲直りできる関係がうらやましい」「あんな友達がほしい」という言葉が見られるようになりました。今の世の中は、一つの失敗や挫折で人生が行き詰まってしまう空気があるように感じます。夢や目標を持つのはいいこと。同時に、視野をもっと広げて柔軟な考え方を身につけてほしい。私も最初から作家を目指していたわけではなく、サラリーマン生活が順調ではなかったからこそ、児童文学に出会えた。それに、大学で文系ではなく理系を選択し、理系の思考を持てたことが今の創作活動にプラスとなっています。特に大学の4年間は沢山のことを体験できるチャンス。一つのことにとらわれず、さまざまなことに挑戦し、豊かな学生生活を送ってください。

### 地元でも愛される「ズッコケ三人組」

「ズッコケ三人組」は那須さんの出身地である広島市己斐周辺を舞台としています。2009年には、「花山駅」のモデルとなった西広島駅の前に三人組（ハチベエ・ハカセ・モーちゃん）の像が設置され、地元の高校生が保全活動を行っています。

特集2 島根大学のいま

# 祝 10周年を機に抱負を新たに 法人化10周年記念式典を開催

今年度は、島根大学が国立大学法人となって10周年を迎えます。それを記念して、10月11日、松江キャンパス大学会館にて「島根大学国立大学法人化10周年記念式典」を開催しました。

当日は、本学教職員のほか、同窓会、後援会、企業や自治体、そして地域の方々約130名が列席。小林学長の「改革を進めながら、さらに開かれた大学を目指す」との抱負が述べられた後、文部科学省高等教育局国立大学法人支援課長の豊岡宏規氏のご挨拶、独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター長の泉紳一郎氏の記念講演、COC事業紹介、表彰式（Rubyプログラミングコンテストin島根、学長表彰）の順で式典が進められました。

列席の方々からは、島根大学の今後に対する期待の声が多く聞かれ、地方の総合大学として担うべき役割を強く認識させる式典となりました。

力強く抱負を述べる小林学長。

泉氏による記念講演「地方総合大学のイノベーションへの貢献」。

## 学長表彰を受けられた方の声

### 地域の防犯パトロールなどボランティア活動による貢献に対し表彰

セーフティ・かわつ 会長 小山 昭氏

島根大学の学生には、夜間パトロールや放課後の児童見守りといった活動にも積極的に参加していただいていますが、大変真面目で助けられています。最近は留学生の参加も多く、島根大学の国際化を感じます。今後も大学が地域住民に馴染み深い存在として、より理解が進んでいくことを期待します。

### 同窓会活動全般を通じて長きにわたり島根大学に貢献したことに対し表彰

島根大学法文学部同窓会 前同窓会長 盛山 正義氏

これからの島根大学に期待するのは、「個性を持った大学」と「国際社会で必要とされる大学」になることです。同時に、今は地方の時代とも言われています。地域で活躍し、さらに積極的に外へも出ていく。そんな人材を育成していくのが地方大学の使命だと感じています。

学長表彰
長年にわたり多方面から島根大学に貢献した方々に対し、その感謝を込めて行われた表彰。

特集3 活躍する卒業生

# 小倉典子さん

## アメフト米国女子プロリーグで優勝に貢献し シーズン最優秀守備選手賞を受賞

教育学部を卒業後、アメリカ女子プロフットボールチームで活躍する小倉典子さん。ボストン・ミリッシャの一員として、8月2日に行われた決勝戦で念願の全米優勝を果たし、2014年シーズンの最優秀守備選手賞を授与されました。

小倉典子さんプロフィール

1982年、鳥取生まれ。2001年島根大学総合理工学部に入学、その後教育学部に転部。小学校講師を経て、2007年アメリカで女子プロアメリカンフットボールのトライアウトに合格し、カリフォルニア州サクラメント・サイレンスに入団。2014年にマサチューセッツ州のボストン・ミリッシャに移籍し、ディフェンスラインで活躍中。

## 島根大学は選手としての基礎を作った場所

小倉さんは、中学生のときにスーパーボウル（アメリカンフットボールリーグNFLの優勝決定戦）に出場したテレル・デイビス選手に影響を受け、島根大学で本格的に競技を始めました。在学中はアメリカンフットボール部「ウォリアーズ」に在籍し、男子に混ざって練習をこなし、東京の有力チーム（コーチング留学をするほどアメフトに熱中。充実した競技生活を送る中で「大学でプレーすることで、アメフトへの想いの強さを再確認」できたことがプロを志すきっかけとなりました。また、総合理工学部から教育学部生涯学習課程スポーツ科学コースに転部したことで、「科学的なトレーニング方法やケガについての知識、栄養学など、スポーツ選手にとって重要な基礎を勉強することができた。先生たちの柔軟な対応に感謝している」と当時を振り返りました。

本場のアメリカに渡った後、サクラメント・サイレンスからボストン・ミリッシャへの移籍を経て、全試合勝利で全米優勝という悲願を達成した小倉さん。今後の目標として、「アメフトは山陰ではあまり馴染みがありませんが、私のプレーを通じて注目してもらえたらうれしい。そのためにも全試合に出場して、見る人に力を与えられるようなプレーをしたい」と力強く抱負を語っていました。

### 「ウォリアーズ」中四国学生リーグトーナメント準優勝

島根大学アメフト部「ウォリアーズ」は、2014年中四国学生リーグでトーナメント決勝戦に進出。惜しくも決勝では敗れましたが、その大活躍ぶりには「OGとしてとても嬉しく思っています」（小倉）とのこと。来年は現役部員たちも優勝を目指し練習に励みます。

前列右端が小倉さん。

# 地域の歴史を明らかにすることで個性や課題をあぶり出す

思想史の観点から主に宗教論争の歴史をひも解き、その背景を考察する小林教授に話を伺いました。

法文学部　社会文化学科　教授
小林（こばやし）　淮士（じゅんじ）

この分野の研究では、自分の足で動いて史料を探していくことが重要です。学生にもそういった指導をしています。

## 宗教から見た日本社会の歴史的特徴を考察

小林教授の専門は近世日本における宗教者間の論争・紛争についての研究。主に島根県地域での事例を取り上げてその背景などを明らかにしていくことで、地域の個性、ひいては日本の歴史の横顔に迫っていく。

具体的には、中世から近世までの古文書をあたり、当時の実際を知ることがまず重要なステップ。しかし、それは簡単なことではない。たたら製鉄や石見銀山などで知られる島根県には、歴史的な資料（＝史料）が数多く残されているにもかかわらず、その調査はこれまで十分には行われていなかった。どこにどんな史料が存在しているか、不明なことが多かったのだ。島根大学に赴任した直後の小林教授も、最初はこの壁に阻まれた。

事例がなかなか集まらないことで研究が進まない。そこで浄土真宗に関する資料を求めていた小林教授は、島根県ではなく、本山である京都の西本願寺を調査。すると、目当ての事例に関する古文書が多数見つかった。「これをきっかけに島根県内の調査が可能になり、史料が芋づる式に見つかっていきました」（小林）。

出雲地方南西部や石見地方では、江戸時代半ば以降、宗教者間の争いが頻発した。特に有名なのは「浜田宗論」と呼ばれるものだが、小林教授は史料を収集・調査することで、こうした事例の背景を明らかにし、歴史的特徴を考察していく。それにより、地域の個性や当面する課題について考える手がかりを得ていくのである。

## 調査研究の成果を、広く市民に

小林教授の重視するものに、「埋もれている史料を誰もが利用できるようにすること」（小林）がある。活字化されていない近世の史料は、くずし字で書かれているため、読める人が限られる。そうした史料を

歴史学専修演習での実地調査。「学生には自分の好きな分野を発展させて研究課題にして欲しい」（小林）。

授業の一環として行う隠岐島での古文書の整理。

小林教授が編纂に携わる『松江市史』の既刊2巻。

解読し整理することも研究者として大事な役目だと位置づけ、学生にもその解読法を指導する。研究で調査した史料は全て目録を作成して後の活用に備え、島根県内の自治体に協力して定期的な整理にも回っている。

また現在、月1回の松江市立中央図書館の「古文書を読む会」では、くずし字で書かれた古文書の読み方を一般市民の方々にも教えている。50名ほどの参加があるこの会は、もう16年続いており、熱心な参加者の中には自分で本を出版した方もいるとか。

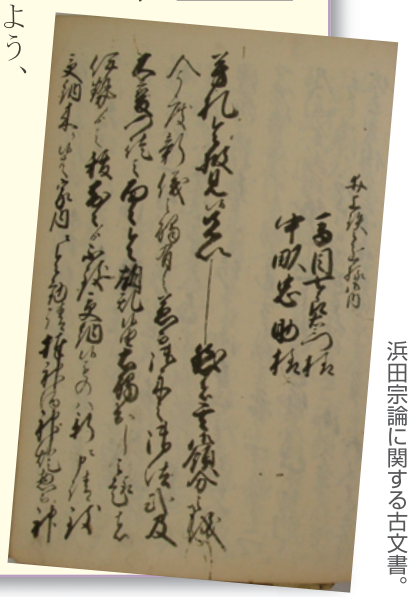
小林教授の目下の課題は、『松江市史』の編纂だ。戦後初となるこの市史は全18巻で構成され、小林教授はこのうち通史編2巻、史料編4巻の編纂に携わる。作業がスタートして4年目になり、すでに刊行された巻に対して、市民から質問が寄せられることもしばしば。「まだ公開されていない史料を公開していくことが喜び」と語る小林教授は、自身の調査研究の成果を広く市民に知ってもらえる機会として、この編纂にも意欲的に取り組んでいる。全てが刊行されるのは平成30年の予定だ。

**注目キーワード**

**【浜田宗論】**

江戸中期、当時の浜田藩が神宮大麻（伊勢神宮の御札）を神棚に祀るよう、お触れを出したことに端を発した仏教宗派間の争い。神祇不帰依の教え（阿弥陀如来以外の神仏を信仰しないこと）を説く浄土真宗がこれに反発し、他の宗派と論争になった。

明和4年に始まったことから「明和の宗論」とも呼ばれる。



浜田宗論に関する古文書。

# 病気の研究と人材の育成を通して地域と日本の医療に貢献

医師・教育者・そして研究者としての第一線に立つ木下教授に、新たな病気のガイドラインづくりや、研究を支える人材の育成について話を伺いました。

医学部　内科学講座　教授
木下（きのした）　芳一（よしかず）

私のところには、つらい症状を抱えながらも原因が分からず困っている人が日本中から来られます。そんな方々のためにも様々な病因を解明し、「見えない病気」を無くしたいですね。

## 「逆流性食道炎」研究の第一人者として先を見越した研究に取り組む

つらい胃もたれや胸焼けなど、日本の成人の5人に1人が胃の不調に悩んでいると言われている。そんな多くの患者の悩みを解決してきたのが、消化器内科の第一人者・木下教授である。特に力を入れて取り組んでいる研究の一つが『逆流性食道炎』の病態解明だ。

「私が学生の頃、逆流性食道炎という病名はなく、教科書にも載っていなかった。ところが1970年頃から、欧米の白人を中心に、食後に数時間胸焼けが続いたり、呑酸（すっぱいものがこみあげる）症状を訴える人が増えているということが判明しました」（木下）。

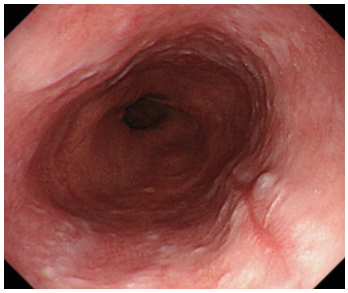
欧米の肉を多く食べる食生活や、下水道の整備による衛生環境の改善で胃の中に住みつくピロリ菌が減少したことなどが原因と考えられたため、「それならば、食生活が欧米化し、しかもアメリカより20年位遅れて下水道を整備した日本でも、これから同じような症状を訴える患者が増えるのではないか」ということで調査を開始。すると予想通り、日本でも患者数がどんどん増えたという。

「つまり、逆流性食道炎自体は大変身近な病気ということで、例えば食生活の改善や投薬で治る人もいる。ただし症状が悪化すると、悪性の腺がん等の食道がんを引き起こしてしまいます。現在、日本で腺がんの患者は、食道がんの患者全体の3～4％なのですが、20～30年前まで同じ状態だったアメリカでは、今や60％にも増えています。日本でも同様に腺がんの患者が増えるのでは、という懸念があり、治療法や診断法の研究を続けているのです」（木下）。

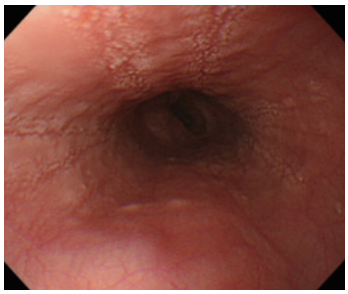
## 「見えない病気」をガイドライン化し日本の医療の基準をつくる

木下教授のもう一つの研究テーマが、逆流性食道炎と似た症状を起こす「好酸球性食道炎」である。食道のアレルギーが原因だと考え

健康な食道の内視鏡写真。粘膜の中にある血管が細く赤い線として綺麗に透けて見えている。



軽症の逆流性食道炎の食道。右下にある縦長の赤い線が傷で、その周辺の白い部分は浮腫。



好酸球性食道炎の食道。縦方向の溝の周りが白くなっており、軽症の逆流性食道炎との区別が難しいため、確実に判断するための新しい診断方法が必要となる。

生物資源科学部の山本達之教授の研究グループと医学部第二内科のメンバーで打ち合わせ。

られており、日本ではまだ症例数自体が少ないのだが、欧米で増えているため、厚生労働省と連携し、原因の解明や適切な治療法の研究を推進している。

「現時点ではまだ、好酸球性食道炎の症状の患者を診ても、何の病気か分からない医師も多いのが事実。全ての医師がきちんとした診療・治療ができるように、診療のガイドラインを作成し、標準医療を行えるよう環境を整えている段階です」(木下)。

診療のガイドライン作りと同時に重要になるのが、医師のスキルアップだ。今はまだ、胃の調子が悪い患者さんに対して逆流性食道炎の治療をして、それでも症状が改善しない場合はお手上げという状態。でも実はその中の20人に1人は好酸球性食道炎ではないかと考えられる。「逆流性食道炎と好酸球性食道炎の症状は、内視鏡で見る微妙な差では判断が大変難しい。だからこそ、たとえ他大学、他病院のスタッフであっても育成し、島根大学から情報を発信しなくてはいけない。これぞまさに今、本学が取り組んでいる※COC事業(地(知)の拠点整備事業)としての活動に相応しいのではないでしょうか」(木下)。

最後に木下教授に、今後の目標を聞いてみた。「うんこから遺伝子まで調べて、原因が見えない病気を無くすのが私の夢です」(木下)。

※木下教授は医・生物ラマンプロジェクトセンターのメンバーとして、生物資源科学部の山本達之教授と共同研究を行い、センターの研究テーマであるラマン分光法の医・生物応用の一環としてラマンを用いた新しい好酸球性食道炎の診断法の開発を行っています。

注目キーワード

## 【新しい病気の概念「機能性ディスペプシア」とは?】

機能性ディスペプシアとは、胃痛や胃もたれなどの症状が慢性的に続いているにもかかわらず、病院で検査をしても大きな異常が見つからない病気のこと。以前は「慢性胃炎」や「神経性胃炎」と診断されていたが、胃炎があっても症状があるとは限らず、逆に症状があっても胃炎が認められないことも。そこで、症状があってもそれを説明できる異常が検査でも認められない場合、胃に炎症があるなしにかかわらず「機能性ディスペプシア」と呼ばれるようになった。

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」＝大学COC事業
島根大学での各プロジェクトセンターの活動について毎号紹介します

様々な展示会に出展し、産品をPRするのも重要な活動。

商品化された焼酎、ソース、清涼飲料水。
前にあるのは特産品の出雲おろち大根。

# 地域資源を活用した自立を促進

## 農林水産業の六次産業化プロジェクトセンター

六次産業とは、農林水産業である「一次産業」の主体者が、加工・製造の「二次産業」、流通や販売の「三次産業」までをトータルで行う経営形態のことです。あくまで一次産業が主体となるため、「二次」と「三次」をそれぞれかけ算することで「六次産業」と呼ばれます。

島根県は豊富な農林水産資源を持ち、近年では、それらを加工した魅力ある地域産品の開発や製造も活発になってきました。そうした中で島根大学では、学内にある機能性の解析技術やマーケティングなどの知的資源を有効に活用して地域に貢献するため、医・工・農の協働による学際的取り組みを行っています。

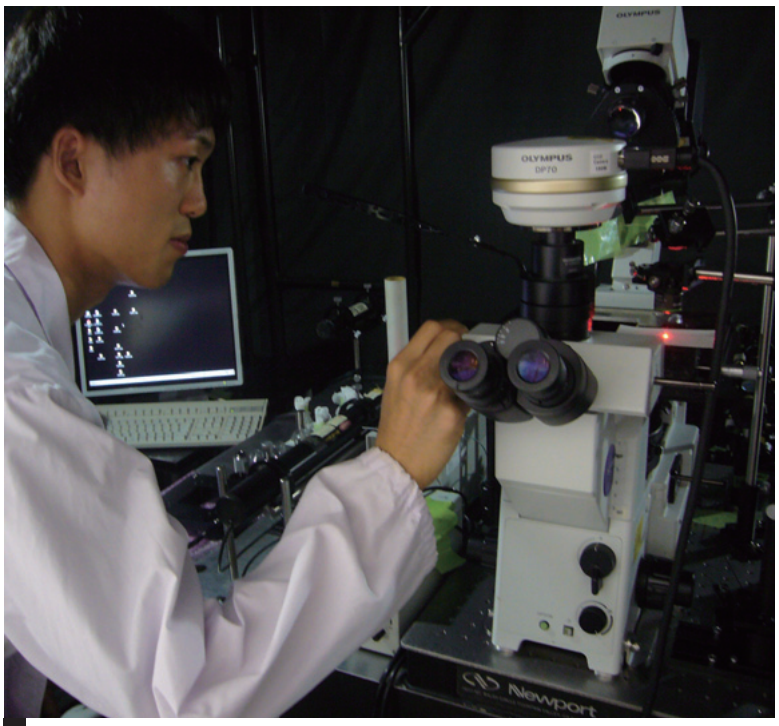
農林水産業の六次産業化プロジェクトセンターでは、現在約20名のメンバーが「地域特産品の価値創出」「医食同源商品化」「環境循環型技術開発」「地域ビジネス開発」のグループに分かれて、商品開発や機能性検証、市場開発などに取り組んでいます。主な目的は、地域の生産者と協力し、島根県独自の六次産品の創出や流通販売の手助けをしていくことです。

既に、特産品である出雲おろち大根を使ったソースや西条柿から作った清涼飲料水などが製品化され、市場に出つつあるところ。また、こうした取り組みを通じて、生産者だけでなく自治体との連携体制も強化されてきました。今後も多方面へのネットワークを広げていきながら、地域資源を活用した島根発のブランド構築に力を注いでいきます。

島根大学 生物資源科学部
教授 板村 裕之

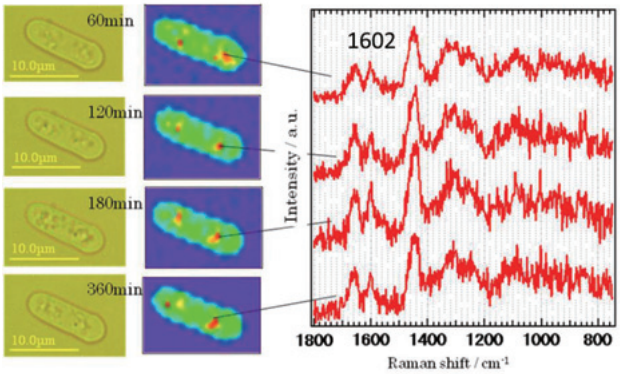
一次生産者の中には、品質の高いものが作れても、加工やマーケティングのノウハウがないために、もう一歩進むことができないでいる方々もいらっしゃいます。そうした生産者の方々と大学が手を組むことで、より大きな市場に進出できる商品開発の可能性が広がります。

いずれは島根県産の食材や商品だけで構成されたアンテナショップ的なレストランを開いて、県内外へその魅力を発信していくことができるようになることが理想です。



ラマンスペクトル測定の様子。

▼分裂酵母の光学写真（左）とラマンイメージング（中央）とラマンスペクトル（右）。




# 生命（いのち）のきらめきを視（み）る

## 医・生物ラマンプロジェクトセンター

「ラマン」とは、インドのC・V・ラマンという物理化学者の名前です。C・V・ラマンは、光の散乱現象「ラマン散乱」を発見したことでノーベル物理学賞を受賞しました。「ラマン散乱」とは、分子に当たった光の一部が分子振動と相互作用を行って、元の波長から少し変化するという光の散乱現象です。分子によって散乱された光のエネルギー分布（ラマンスペクトル）が異なるため、それを測定すると分子の性質を調べることができます。この手法で物質の性質を知る方法を「ラマン分光法」といいます。

ラマン分光法の優れたところは、測定する物質に対する前処理が一切不要で、しかもその物質に損傷を与えないという点です。「医・生物ラマンプロジェクトセンター」では、現在1名の専任教員と14名の兼任教員が所属して、このラマン分光法を医学や生物学の分野に応用しています。

例えば、今までは組織を切り取らなければならなかった病気の検査を、ラマンスペクトルを測定するだけで行う医療診断装置の開発。他にも、生きた細胞の中の核やミトコンドリアに含まれる分子の情報を、細胞を傷つけることなく調べたり、酒やパンの製造に欠かせない微生物である酵母を用いて、様々な生理活性物質を与えた際の酵母の生育への影響を調べたりもしています。持ち運びできるラマン測定装置を漁港に持ち込んで、水揚げされた魚の栄養成分を現場で直接測定する試みも行っています。

島根大学 生物資源科学部
教授 山本 達之

医・生物ラマンプロジェクトセンターでは、ラマン分光法を分かりやすく解説する市民向けの公開講座にも力を入れています。昨年は、松江市と出雲市で1回ずつ行いました。

私たちの研究成果によって、近い将来、島根大学医学部附属病院の外来でラマン分光法による病気の診断が普通に行われるようになるかもしれません。

島大の多彩な活動をチョイスしてお伝えします

# しまだいトピックス

## 島大職員チーム、4連覇達成！

## 日頃の心肺蘇生の練習成果を発揮

11月2日、日本赤十字社島根県支部主催の第5回赤十字救急法競技大会に本学職員チームとして、今回は附属農場の教員と技術職員が出場。心肺蘇生の部で、4年連続の優勝となりました。

なお、本大会には教育学部附属中学校生徒も4チームが心肺蘇生の部に参加。学生赤十字奉仕団も大会スタッフとして多数参加しました。

## 外国人留学生が邑南町の方々と交流

## 田舎ならではの暮らしや温かい人情を体感

留学生の日本文化理解のさらなる深化を図るため、島根大学と包括協定を結んでいる邑南町の協力のもと、国際交流センター主催の第5回目となる邑南町見学旅行を9月6日から9月9日にかけて実施しました。

今回は19名の留学生（9カ国出身）とそのサポートとして3名の島大生が邑南町を訪ね、「島根の田舎と世界の縁結びプロジェクト2014」と銘打ち、中島記念国際交流財団の助成を受け、実施しました。

留学生たちは、毎年恒例の農家民泊での田舎生活体験に加え、今年が2回目となる県立矢上高校での交流会（クッキングとディベート大会）、さらに今年初の取り組みとなる邑南国際交流まつりでは邑南町や瑞穂アジア塾等の協力のもと、地域住民の方との有意義な国際交流を実施しました。また、出羽神楽団による「八岐大蛇」の演舞と衣装体験、高原小学校の元気な児童たちとの異文化交流会及び給食会も行いました。

留学生たちはこれらの経験を通して、日本の伝統・生活文化についての理解を深め、邑南町の人々の温かい人情を知ることができました。

## おしらせ

### 学生市民交流ハウスを利用してみませんか

学生市民交流ハウスはイベントやサークル活動などにもご利用いただけます（要予約）。詳しくは島根大学ホームページをご覧いただくか、市民パスポート会員担当へお問い合わせください。

◎お問い合わせ先
島根大学総務部総務課 市民パスポート会員担当
TEL　0852-32-6603
E-mail　webinfo@office.shimane-u.ac.jp
【島根大学ホームページ】
http://www.shimane-u.ac.jp/
「交流ハウス」で検索

地域に広く開かれた大学として、これからも色々な情報を発信してほしいです。
（島根県大田市・50代女性）

読みやすくてよかったです。若い人たちが頑張る姿に元気をもらいました。
（島根県雲南市・50代女性）

島大と県内の各市町村との関わり方や交流について知りたいです。
（島根県出雲市・30代男性）

## 横川敬さん（医学部6年生）が神戸市「花時計賞」を受賞

# 医療を志す学生として人命救助に貢献

8月24日に神戸市の王子公園競技場で行われたフラッグフットボールの大会で、島根から参加した選手が卒倒する緊急事態が発生。同じチームだった横川さんは「最初は何が起きているのか分からず、AEDという言葉を聞いて切迫した状況だと知り」現場に駆けつけました。そして、医療を学ぶ自分が何もしなければ悔いが残ると自ら申し出て、心臓マッサージを施し、無事心肺蘇生に成功。この行動により神戸市長から「花時計賞」が贈呈されました。

「実際の緊急現場を経験したことは将来につながると思います。何より相手が助かったのが一番」と話す横川さんの将来の夢は、外科医になること。医学部卒業後はこの経験を糧に実践を積み、地元である松江の医療を担う医師を目指します。

**「花時計賞」とは？**
人命救助や環境保全活動など、日常生活における身近な善行を行った個人や団体を神戸市長がたたえ、善意を社会に広めることを目的とした市民表彰です。

## 医療技術を磨く、島根大学独自の取り組みをご紹介

### 医療従事者に技能トレーニングの機会を提供

# クリニカルスキルアップセンター

クリニカルスキルアップセンター長　医学博士
狩野賢二

医療の知識や技術を習得するには、経験を重ねることが重要です。そこで島根大学医学部附属病院においても、学生および学内外の医療従事者を対象とした様々な技能トレーニングの機会を提供するために作られたのが「クリニカルスキルアップセンター」です。

「ここでは18の実習室とモデル人形（シミュレータ）を用いて、聴診や採血といった基本手技から各診療科に特化した特殊な医療技術まで、様々な臨床現場を再現することができます。例えば『蘇生訓練室』では、1体6,000万円の高性能シミュレータを用いて、希少症例など高度な臨床トレーニングを行えます。また、病棟内の病室をそっくりそのまま再現した『病棟訓練室』では、ベッドの移動ひとつとっても、どの向きに動かせば他の医療スタッフの動きや医療機器搬入を遮らないか等をリアルに体感できる。このような実践的な学びを繰り返すことで、学生のレベルの向上につながっていると実感しています」（狩野）。

もちろん、学外の医療従事者にも広く門戸を開いており、5人の専属スタッフが、年間700～800回の研修を開催。地域全体の医療技術のレベルアップを図っています。

「これだけの規模で医療従事者のトレーニングを行っているのは、国立大学の中でも1番ではないでしょうか。さらに現在、教える側の人材を育成する『医療シミュレータ教育指導者養成コース』も実施しています。今後の目標は、島根県西部や離島にシミュレータを持参して研修を行うこと。大学の使命として、島根県全体の医療の質を上げていきたいです」（狩野）。

### ◎学生自らが臨床の知識を深めるためのサークル

## 「SCOP」

医学部の4年生を中心に、医療手技を学ぶサークルです。興味が湧いたことを自主的に勉強するのは大変楽しく、また、後輩に教えることで自分自身の理解も深まるので、とてもよい勉強になります（高倉）。

代表の高倉竜彦さん（医学部4年生）
（写真右端）

**読者の声**

広報しまだいVol.22に寄せられた声をお届けします。

島大生の様子が身近に感じられました。総合医などの新たな分野も知れてよかったです。
（島根県江津市・40代男性）

卒業生が地元で貢献している記事を読んで応援したくなりました。
（大阪府大阪市・20代女性）

# タイ王国タマサート大学医学部の教員が島根大学医学部附属病院を訪問

9月22日から24日までの3日間、タイ王国タマサート大学医学部から外科系の教員9名の方が本学医学部附属病院を訪問されました。

この訪問は、9月2日にタマサート大学と本学の交流協定が締結され、教員の交流・学術情報の交換など、交流促進を図ることを目的に実施されたものです。

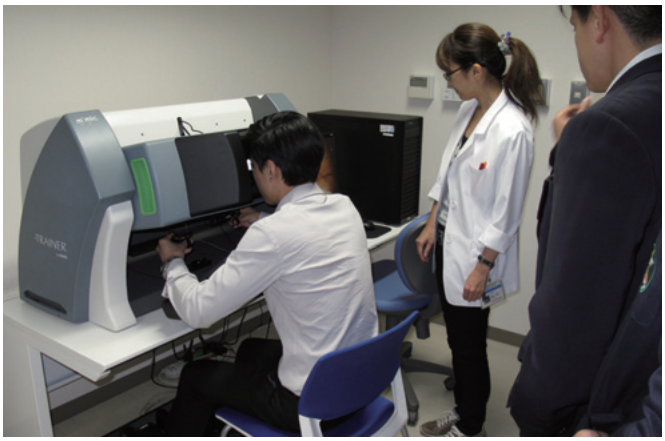
初日は、両大学の概要の説明と今後の学生交流についてディスカッションを行った後、病院内（リハビリテーション部・検査部・放射線部）の見学を行いました。

2日目は、内視鏡トレーニングセンターにおいてロボット手術支援システム（ダ・ヴィンチ）のシミュレーションや、クリニカルスキルアップセンターで聴診や採血などのシミュレーションを行いました。

最終日には、泌尿器科においてダ・ヴィンチを用いた手術の説明を受けた後、実際の手術の見学も行いました。

今後のタマサート大学と本学の交流が活発に行われることが期待される訪問となりました。

▲クリニカルスキルアップセンターでは、スタッフが書いた『ยินดีต้อนรับ〈インディートーンラップ〉』（ようこそ）の看板でお出迎え。タマサート大学の皆さんから大好評でした。



ダ・ヴィンチを使ったシミュレーションの様子▶
島根大学では、平成24年10月にロボット手術支援システム「ダ・ヴィンチ」を導入。ダ・ヴィンチによる前立腺がんの手術実績を生かし、タマサート大学を支援する予定です。

▼聴診のシミュレーション
モデル人形（シミュレータ）を用いたトレーニング。安全で安心な医療を実践するための医療技術の習得をサポートします。

▲ディスカッションの様子

しまだいNEWS ❷

# 島根大学教育学部附属中学校コーラス部が全日本合唱コンクール全国大会に出場

9月21日に広島県で開催された第53回「中国合唱コンクール」で、附属中学校コーラス部が金賞を受賞し、5年連続での全国大会出場を達成。10月26日に岩手県で行われた全国大会では、混声合唱の部で銀賞を獲得しました。

▲合唱練習風景。パート練習前に手や体の動きをつけながら全員で発声練習を行う。

附属中学校コーラス部は、中国大会の上位数校しか出場できない全国大会の切符を5年連続で手にしている強豪校。部員が高い意識とモチベーションを保ち、コンクールに臨める理由の一つとして、普段の練習から自主性を重んじていることが挙げられます。細かな調整が必要な大会前を除き、練習内容と時間配分は部長・副部長が決め、顧問の小村聡先生へ報告。さらに、ミーティングでは、持ち回りでその日の目標と達成度を振り返り、全員の前で発表しています。

「中学生は心も体も成長が著しい時期。部活動で学ぶことは他にも生きてきます。挨拶はもちろん、自分の意見を言える生徒になってほしい」と話す小村先生のモットーは「心が動けば体が動く」。全身を楽器として表現する合唱だからこそ、個々の集中力や気持ちの一致が肝心と考えています。

◀9年間コーラス部を指導している音楽科の小村 聡先生。

コーラス部では、気軽に表現ができる合唱のよさを広めたいと、小学校などでの発表も行っています。今後もコーラス部の心身から生まれる美しいハーモニーにご期待ください。

▲部室の棚には地区大会や全国大会の賞状や盾が並ぶ。

## これからも合唱を続けていきたい

部長・勝部夏美さん（3年生）

小学生から合唱を始めましたが、伝統あるコーラス部の部長になることはプレッシャーでした。特に、運動部を引退して入部した3年生の男子学生をうまくまとめるのは苦労しましたが、自分たちのカラーを作れることにやりがいもありました。3年生は11月に引退ですが、卒業しても合唱を続けたいと思います。

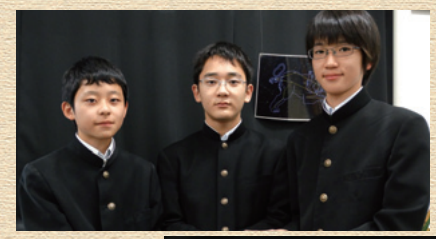
しまだいNEWS ❸

# 島根大学教育学部附属中学校3年生が「Bridge」の活動を報告

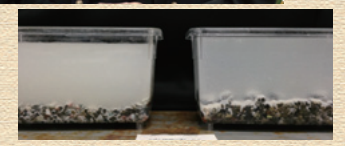
附属中学校では、体験活動を中心とした総合的な学習の時間を「Bridge」と名付け取り組んでいます。今回はその中の2グループの活動を紹介します。

## 水を浄化する宍道湖のシジミを守ろう

「シジミ研究員」グループは、教育学部の松本一郎教授に相談し、米のとぎ汁を用いた実験を実施。シジミを入れた水槽の方が水の透明度が高くなるという結果を得ることができました。「シジミに水を浄化する働きがあることが分かりました。美しい宍道湖の環境を守るためにも、みんなで富栄養化やシジミの乱獲を防ぎましょう」（シジミ研究員）。



左から川部知也くん、野々村允瑞くん、金坂淳平くん。



左がシジミなし、右がシジミありの水槽。

## 心肺蘇生・AEDの技術を学び、万が一に備えよう

救急法の講習会に参加した「心肺蘇生・AEDチーム」は、この技術で人の命を助けられることを知り、多くの人に伝えたいと啓発活動を企画。日本赤十字社島根県支部の指導のもと練習を重ね、赤十字救急法競技大会に参加しました。「誰もがこの技術を身に付けておくことが重要です。一人でも多くの命が救われるために、講習会に参加し、万一に備えましょう」（代表 村尾舞妃）。

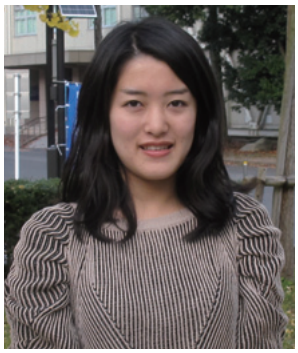
心肺蘇生を行うメンバー。

留学生・留学体験者大集合！

# 海を越えた島大生

## 違う世界を知ることが自分の見る景色を変える

**押村 麻里子さん**
（アメリカ「アーカンソー大学」へ留学／教育学部4年生）



アメリカ留学中の姉を訪ねたとき、日本にいた頃とは違う積極的な姿に衝撃を受けたことが、留学を考えるきっかけでした。留学先のアーカンソー大学では、アメリカ文化の授業や基礎心理学、コンサートバンドの授業等を受講。大学には世界各国から留学生が集まっており、南米やアラブ諸国など、あまり知らなかった国の人々と知り合えたことは私の視野を広げてくれました。

## 丁寧で几帳面な日本のシステムを母国に伝えたい

**グナワルダナ ラシスさん**
（スリランカ「スリジャヤワルダナプラ大学」からの留学生）

父親がパナソニックの現地社員であることに加え、日本に留学経験のある先生から日本人の人柄をよく聞いていたので、日本を身近に感じていました。来日4年目の今では日本の生活にも慣れ、国際交流イベントや地域の防犯パトロールといった活動を通じて、多くの友達ができました。帰国後は、効率的な日本のシステムを母国に伝え、両国の交流の架け橋となりたいです。

シリーズ企画
総合医を目指して
完

# 幅広い研修内容を通して総合医としての知識と技術を身に付ける

特定の臓器や疾患に限定せず、あらゆる患者に対応する「総合医」のニーズの高まりを受け、島根大学が今年度より新たに設置した研修医制度の特別プログラムを紹介するシリーズの最終回。現在４つ目の科で研修中の研修医・藤井俊吾さんに、その内容や日々の気付き等を伺いました。

## 「物言わぬ患者」に戸惑った「麻酔科」そして患者さんの心と向き合う「緩和ケア」

藤井さんの消化器内科、腎臓内科に続く研修先が「麻酔科」です。

「麻酔は、結果がすぐに患者さんの体調に現れることに驚きました。例えば血圧が下がっている患者さんに血圧を上げる薬を投薬すると、即効果が出る。麻酔科の前の腎臓内科研修では、腎臓は食事や薬を変えながら長いスパンで結果を待つ感じだったので、あまりの違いに戸惑いました。また、患者さんは麻酔で眠っているので、直接話をすることができないのが、これまで研修してきた科との大きな違いです。何しろ患者さんが痛いのか、苦しいのか直接聞くことができない。血圧や体温など様々な数値を見ながら、患者さんの状況を判断するしかないわけです」（藤井）。

つい数値ばかりに気をとられていた藤井さんですが、先生から「患者さんの生の反応を見なさい」というアドバイスが。先生方の患者さんへの気配りに経験の差を感じつつ、間近で見れて良かったと言います。

現在は「緩和ケア」の研修を始めたばかり。「がん患者さんの身体的、精神的なつらさを和らげてあげたい。でも、どういう風に接したら良いのか、まだ踏み込むことができずにいます。何が自然の経過で、何が苦痛なのか。積極的な治療をするのかしないのか。考えることがいっぱいの未知の世界。自分がどこまでできるか、一カ月でしっかり習得したいです」（藤井）。

シリーズ最終回ですが、まだまだ研修の続く藤井さん。島根大学はこれからも応援していきます。

研修医・藤井さんのつぶやき

### 多様な経験を通して幅広い視野を習得今後の研修にも期待

研修が始まってあっという間に半年が経過しました。正直、何ができるようになったか？と聞かれれば、技術的にはまだまだ習得できていないことが多いと思います。その一方で、一つの検査結果に対して様々な方向から物事を考えられるようになったのは、幅広い科で研修を積んできたおかげだと実感しています。

来年度からは、島根大学医学部附属病院以外での研修に入ります。家庭医療の専門である千葉県の「亀田ファミリークリニック館山」では、本物の家庭医・総合医とは何かを早く見てみたい。また「大田市立病院」では、地域の人が何を求めているのか、地元の医療事情をしっかり肌で感じられたらと、今から楽しみです。

常をご紹介
pus
スチェック!
eck

ステージ進行も自分たちの手で!

学生キッチンの「わたがし」は、子どもたちに大人気!

陶芸部は、自慢の作品を販売。

## 秋のイベントスペシャル!

# 01 大学生がつなぐ、大学生がつくる! 地域のお祭り【秋縁祭】

学生と地域をつなぐお祭りとして昨年度からスタートした「秋縁祭」。今年度は10月25、26日の両日、松江城二の丸下の段で開催されました。昨年に引き続き実行委員長を務めたのが武田さんです。これまでも自身が立ち上げた地域活性化サークルで様々なイベントを行ってきましたが「今回の秋縁祭は、その集大成」と言います。

「これまでやってきた様々なイベントを通して、地域のいろいろな方とつながりを持つことができたので、今回の秋縁祭では島大生だけでなく、一般の方にも企画に参加していただいたり、出展者の皆さんからも様々な協力を得たりすることができました」

その言葉通り、地域活性化のチームである『山陰効果団地』プロデュースによるステージや青年会議所のイベント、さらには飲食メニューの増加など、前回より一層充実した内容となりました。

一方で大変だったことを聞いてみると、「学生メンバーの意志の共有」との答えが。「学年の異なる20名の実行委員メンバーをまとめていく上で、同じ想いを持つことが意外と難しかった。だからこそ、代表として仕切っていくというよりも、他のメンバーたちが自主的に動けるよう"見守ろう"という意識で取り組みました」

今後の目標について聞いてみると、「もし後輩たちが秋縁祭を続けてくれるとしたら、単に島根大学のイベントとしてではなく『島根県の秋のイベント』になるくらい大きく育ててくれるとうれしいですね。個人的には、今後は仕事を通して、自分の住む地域の魅力を全国に、そして世界に発信していきたいです」と語る武田さん。卒業後は屋久島のリゾートホテルへの就職が決まっています。

武田さんの夢は、ますます大きく広がっていきそうです。

頑張った人
武田 翔太さん
(生物資源科学部4年生)

地域の魅力を発信したい!

書道部によるパフォーマンスに、観客は興味津々。

島大生の日 Cam キャンパ Ch

## 02 台風にも負けない?! 情熱でのりきった 島根大学大学祭【淞風祭】

10月12、13日に松江キャンパスで開催された「淞風祭」。2年生にして実行委員長を引き受けた平松さんは、「昨年も実行委員だったので、今年も続けるなら今までやったことがないようなことを体験しよう!」と思ったそうです。「メンバー同士、緊張感を持ちながらも楽しく活動できるように、メリハリをつけるよう気を付けました」

大学祭の内容も、新たな企画に挑戦。昨年度まではお笑いライブを行っていましたが、今年度は「ケラケラ」をゲストに招いての音楽ライブを開催。ライブ当日は台風による悪天候のため、他のイベントは中止になったにもかかわらず、ライブには多くの人が駆けつけ、盛り上がりました。その一方で「本祭2日目が中止になったことで、先輩方に必要以上に助けていただきました。もっと早くからいろいろ考えておけば良かった、ということが反省点です」

実行委員長という立場から、様々な体験をした平松さん。学生だけではなく、地域の方々とも関わることでコミュニケーション能力が成長したと感じています。「地域の方々からの支えが無ければ、大学祭の運営も難しかった。今はとにかく、関わってくださった全ての方に"感謝"の一言です」

頑張った人
平松 佑斗さん(総合理工学部2年生)

ステージを盛り上げる実行委員メンバーたち

## 03 世界を広げるきっかけづくり! 島根大学医学部大学祭【くえびこ祭】

「世界とつながろう」をテーマに、10月18、19日に開催された「くえびこ祭」。実行委員長を務めた高倉さんの印象に残っているのは、メイン企画として開催した「パフォーマンス王NO・1決定戦」です。

「島大生以外の方にも多数参加していただき、ダンスや書道などでイベントを盛り上げていただきました。また、メンバーの年代も幼稚園児からお年寄りまで幅広く、一緒になって何かをすることの楽しさを実感できました」と、日頃なかなか接することのない人たちとの交流を楽しみました。

また、医学部生が自分の大好きな国や地域をポスターにして展示する「おすすめ国コンテスト」では、来場されたほとんどのお客さんが投票してくださり、とてもうれしかったとのこと。

周りの人の協力を感じながら、学業との両立を果たした高倉さん。今後は次の大学祭スタッフが余裕を持って行動できるよう、後輩に早めのバトンタッチを考えています。

頑張った人
高倉 竜彦さん(医学部4年生)

ステージ出演の子どもたちと。

**教えて!先輩! 動画公開中**

高校生の皆さんの疑問に、先輩が動画でお答えします。スマホをお持ちの方は、ぜひご覧ください!

**ご利用方法**

Androidの場合→GooglePlay
iPhoneの場合→App Storeで
『Junaioジュナイオ』を検索してダウンロード

↓

『Junaio』を起動後、画面右上のボタンをタップ。
「チャンネル用QR」をスキャン

↓

QRをスキャンすると、チャンネルのダウンロードが開始されます

↓

高倉さんの写真にカメラをかざすと動画が再生

学生プレス研究会 Vol.5

## 東北からエネルギーを見直す　附属中学校生徒が福島で取材活動

# 被災地の『いま』を伝えるプロジェクト

ソーラーパネルの点検個所について教わる三原くん(左)

全国各地の中学生が東日本大震災の被災地の現状を取材する「写真で綴る、被災地の『いま』を伝えるプロジェクト2014」に島根大学教育学部附属中学校3年生の三原寛貴くん(15)が参加。9月19日から3日間、福島県を訪れました。同プロジェクトは被災地に笑顔を届けようという「スマイルとうほくプロジェクト」(福島民報、河北新報、岩手日報主催)の一環。三原くんが参加した3日間は、岩手、栃木、新潟、山梨、岐阜、島根、広島、香川の8県から参加した中学生が、フォトジャーナリスト・安田菜津紀さん、漫才コンビのロザン(宇治原史規さん、菅広文さん)とともに震災や原発、エネルギー問題について取材し、防災の意識を高めました。

富岡町応急仮設住宅、郡山市役所、福島空港メガソーラーの3か所を取材。三原くんが最も印象的だったといい、自ら撮影した写真は郡山市役所の1本が抜かれた蛍光灯。三原くんは「電力不足だからではなく、使わなくていい電力は使わない、という郡山市役所の職員さんの姿勢に感動した。エネルギーの作り方だけではなく、その使い方も考えていかなければならない」と話しました。

三原くんは「現場を見たり実際に人の話を聞いたりすることが重要だと気付いた」とし、「復興は、モノだけでなく心の復興が一番大事ではないか」と取材の感想を述べました。

(学生プレス研究会・福島達也)

### ドキュメント

▽1日目　16時、福島県・郡山市の商工会議所に、8県の中学生と引率教員が集合。自己紹介で三原くんは「福島の原発と島根の原発は状況が似ている」との認識を示す。続いてプロジェクトの概要説明。福島県の被災状況、現状や日本の電力事情についての話も。安田菜津紀さんが原発の発電原理など基礎知識を紹介。エネルギー問題を含んだ防災について「どういう未来を作っていきたいか。どういう未来を残したいか。それぞれがどういう生き方をしたいのか。考えていきたい」と話す。

取材先での質問を各自で考え発表。「太陽光発電には地域的制限があるが、助け合って電力のシェアはできないのか」「学校で取り組んだ桜プロジェクト(被災地に桜を植える企画)はTVなどでは『嬉しい』という反響があったが実際はどうか」といった質問案が出る。三原くんは「避難生活をするに当たって本当に欲しいものは何か」を出す。

興味深そうにソーラーパネルを撮影する三原くん

▽2日目　10時、富岡町の応急仮設住宅を訪問。ロザンの2人と合流した中学生は、富岡町生活復興支援おだがいさまセンターアドバイザーの青木淑子さん、「語り部」の遠藤友子さんにあいさつ。三原くんは「島根県がこれからどうしていけばいいかを学べれば」。

青木さんが「全国に散らばった町民の新たな絆を作る～東日本大震災のその後を語る」と題して、震災直後と今の富岡町について客観的な視点で説明。「津波後の特徴は、3年半経ってもほとんど状況が変わっていないこと」と。

「被害は地震と津波だけではなかった」――。富岡町は東京電力福島第一原発の半径20㎞圏内に入っている。「町民は避難してもすぐに帰って来られると思っていた。住み慣れた町に、自分の家に二度と帰れないなんて誰も思っていなかった」という話を真剣な表情で聞く三原くん。

川内村へ避難する町民らは着の身着のまま。青木さんは「情報化社会というけれど、情報が必要な人に本当の情報が届かないのではないか」と疑問を投げかける。受け入れ先が次々に満員になり、避難する車の列は新潟まで連なった。最終的に富岡町の人々は全都道府県へばらばらに。

「原発事故で物流がストップ。スーパーもコンビニも空っぽ。ガソリンもない。福島には何も入ってこなかった」。

青木さんが「万一の際に避難所ができたら、ぜひ最初に作ってください」と強調するのは女性の着替えや母親の授乳、相談などができる「女性専用スペース」。三原くんは3日目のワークショップで女性専用スペースについて「女の人の視点は大事」と。

郡山市役所では防災危機管理課の本田和也さんに市の被害や防災の取り組みを取材。3300世帯の1年間の電力量1200kWを発電できる福島空港メガソーラーへ移動、太陽光発電について説明を受ける。三原くんはケーブルチェックする箇所について質問するなど積極的に取材。

▽3日目　9時半からワークショップ。再生可能エネルギーについて三原くんは「島根には大きなスペースもなく、日照時間も長くないので太陽光発電ではさほど発電できないのでは。森林や地勢を生かした木質バイオマスや風力、波力といった再生可能エネルギーに取り組むべきだ」と提案する。

ロザンの2人は「答えが決まっていなくて難しい課題だが、この回がハズレでなくアタリだと思って地元に持って帰って欲しい」（宇治原さん）「各地域でできることがあると思うので友人などと話してほしい」（菅さん）とコメント。安田さんは「各人がどういう生き方をしたいか、その選択を問われていくだろうから、それぞれができることを考えて取り組んでほしい」と述べる。

水産業社長から震災時の様子を聞く小笠原さん（前列左から2人目）

## 小笠原さんも気仙沼を取材

同プロジェクトでは同附属中3年生の小笠原彩華さん（15）も10月11日から3日間、宮城県気仙沼市を訪れ、同様の取材を行いました。小笠原さんは「たくさん学ぶことや発見があり良かった。いろんな人に参加してほしい」と話していました。

島根大学オリジナル芋焼酎
神在の里 好評発売中
生物資源科学部神西砂丘農場で生産された
サツマイモ「ベニアズマ」を原材料とした「芋焼酎」
●神在（かみあり）の里（720ml）2本入りセット…3,200円（税込）

島根大学生活協同組合
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 TEL0852-32-6240
http://omise.seikyou.jp/shimane

印刷テクノロジーで、
世界を変える。
TOPPAN
凸版印刷株式会社 www.toppan.co.jp
松江営業所 〒690-0887 島根県松江市殿町383 山陰中央ビル7F

松江キャンパス

## ［総合文芸部］

個性豊かな総合文芸部の部員たち

**作りたい！ 届けたい！**
**世代を超えて楽しめる冊子**

平成17年に文芸部と映画研究会、SF研究会の合併によって誕生した同部。その歴史を物語るように部室の蔵書は1000冊を超え、1冊の本を囲んだ語らいに熱くなる日もあるようです。

活動の中心は部誌制作で、図書館や生協ショップなど学内各所で無料配布される『Front Line』と部内で配布する『あむてりすく』を手掛けています。

そのうちメインとなるのは『Front Line』です。対外向けという性格上、読者を意識し、「世代を超えて楽しんでもらえるような面白くてしっかりとした冊子作りを目指しています」と部長の藤原唯さん（法文学部2年生）。

部活動の運営方針を話し合う部会準備会の様子

制作期間中は苦労の連続ですが、作品の批評をし合ったり、仲間の作品や着想に刺激を受けたりと「全てが糧になるんですよ」と藤原さん。現在、最新号の制作が進行中です。

出雲キャンパス

## ［ソフトテニス部］

笑顔がトレードマークのソフトテニス部メンバーたち

**誰もが練習したくなるような**
**楽しいコートで**
**仲間と打ち合う充実感**

全日本医科学生体育大会で昨年度は男子団体戦で優勝、今年度は女子団体戦で3位など、個人戦も含めて各大会で好成績を出し続けている同部。

各部員の練習意欲は旺盛で、週3回の練習日以外にも自主練習に汗を流しています。

部員構成は初心者から全国レベルの精鋭までと幅広く、経験値やスキル、目標設定もまちまちです。「だからこそ誰もが練習したくなるような雰囲気づくりを大切にしています」と男子部のキャプテン原野真一さん（医学部3年生）。

大盛況だった「前後入れ替え戦」の一場面

OBやOGの存在も大きく、「先輩方との打ち合いで、スキルアップしながらテニスがますます好きになっていくんですよ」と女子部のキャプテン森口真衣さん（医学部2年生）。

部員同士の仲が良いことから、試合では一丸となって全力応援。勝利の女神が微笑むわけは団結力にもあるようです。

島根大学は、島根スサノオマジックを応援しています！

# 神話第伍章スタート！12選手に声援を！

島根スサノオマジックの神話第伍章は10月4日のアウェイ滋賀戦から来年4月までの全52試合の公式戦がスタート!10月20日現在、残念ながら6戦全敗と西地区10チーム中10位の最下位である。しかし、今年は地元バスケ界のスター・#32安部潤選手や、昨シーズンの奈良のエーススコアラーの#4チャップマンの加入など、決して最下位に甘んじるチームではない!長く険しい道のりを戦う12人のスサノオ戦士を紹介しよう。
ぜひ、会場で選手達への熱い応援をよろしくお願いします。

#1
山本 エドワード
PG

#4
ジョー・チャップマン
G

#9
ビンゴ・メリエックス
PF／C

#15
ジェームス・パジェット
PF／C

#20
河相 智志
G

#21
曳野 康久
SG

#23
アイザイア・ブラウン
PF／C

#32
安部 潤
G

#33
新城 貴史
PG

#41
高田 秀一
F

#44
問 雅臣
G／F

#55
横尾 達泰
SG

**島根スサノオマジックの最新情報・試合・チケットなど**　島根スサノオマジック　検索

お問い合わせ先
**島根スサノオマジック事務局　0852-60-1866**（平日10時～18時）

## 島根大学支援基金寄附者一覧　ご協力ありがとうございました。

（平成26年8月16日～平成26年11月15日にご寄附いただいた皆様）
（五十音順・敬称略）

■冠寄附/学長・理事・監事　海外派遣学生支援基金　・　海外派遣学生支援

■団体からのご寄附/旧制松江高校「はろばろ会」（東京）

■個人からのご寄附

| | | | |
|---|---|---|---|
| 安部　葉子 | 河合　主 | 竹永　三男 | 山田　光政 |
| 嵐　元宏 | 菊池　卓士 | 田中　勝美 | 山中　淑郎 |
| 石野　眞 | 亀甲　保弘 | 田中　賢一 | 山梨　祥子 |
| 板村　裕之 | 熊澤　修 | 多々納　道子 | 山梨　隆 |
| 大浜　誠一郎 | 倉井　正喜 | 為石　勝美 | 山本　隆治 |
| 大場　利信 | 澤　嘉弘 | 平川　正人 | 横山　統晨 |
| 沖貝　浩 | 周藤　憲正 | 水野　重利 | 吉岡　正和 |
| 片岡　道雄 | 宗　陽子 | 村上　周平 | 渡辺　賢 |

島根大学では学生に対する修学支援及び社会貢献事業を充実させるため、「島根大学支援基金」を募集しています。寄附書はホームページにも掲載しておりますが、郵送もいたしますので、お問い合わせください。
TEL:0852−32−6603（総務課）
ホームページ
http://www.shimane-u.ac.jp/introduction/fund/fund_recruit/
※ご寄附をいただいた皆さまの中で、「HP等への掲載を希望しない」とされた方は、掲載しておりません。

**投稿のお願い**

『広報しまだい』は、島根大学と地域の方々との相互理解を大きな目的としています。島根大学から地域に情報を発信してほしいこと、地域の方々からの島根大学に関する話題、島根大学に対する要望、その他ご意見、ご質問などをお気軽にお寄せください。ご投稿お待ちしています。「広報しまだい」はJR3駅（松江、出雲市、米子）に設置しています。ご自由にお持ち帰りください。

**投稿先**

〒690-8504 松江市西川津町1060　島根大学 広報室
TEL：0852-32-6603　FAX：0852-32-6019
E-mail：gad-koho@office.shimane-u.ac.jp
ホームページ：http://www.shimane-u.ac.jp

**プレゼント**

ご意見をいただいた皆さまの中から抽選で10名様に、島大農場で収穫・加工された「煎茶」をプレゼントします。

※当選者のお知らせは発送をもって代えさせていただきます。
※応募締切／平成27年3月13日必着

## 編集後記

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

今年度、島根大学は法人化10周年を迎え、昨年10月には記念式典を開催しました。その様子は今号で少しご紹介しておりますが、私達広報室員も準備から当日まで運営スタッフとして参加しました。記念となる行事でしたので準備は大変でしたが、節目の年にこの式典に関わることができ、とても貴重な経験となりました。

さて、今年で3回目を迎える「古代出雲文化フォーラムⅢ」を3月に大阪で開催します。今回の学長対談では、そのフォーラム第二部鼎談にご出演いただく出雲大社権宮司の千家和比古氏をお迎えしました。フォーラムではまた違う趣きでお話が聞けるのではないかと今からとても楽しみにしています。まだ席に余裕があります。ご都合のつく方は是非お申込みください。

その他にも内容盛りだくさんでお届けしました「広報しまだい23号」はいかがでしたでしょうか?巻末のアンケートハガキをご利用いただき、皆さまからのたくさんのご意見・ご感想をお待ちしております。

島根大学広報誌 広報しまだい Shimadai 2015年1月発行 編集・発行／島根大学 広報室 〒690-8504 松江市西川津町1060 TEL(0852)32-6603 FAX(0852)32-6019 http://www.shimane-u.ac.jp/

いま、紐解かれる神話の世界。

出雲国風土記の中でも
壮大なスケールで語られる
「くにびき神話」。
そこには、物語としては見過ごせない
地形や地名の合致が多数見られます。
当フォーラムでは、
弥生時代から
奈良・平安時代頃にかけての
出雲地域と他地域との交流について
地質学・考古学・文献史学の立場から
学術的にアプローチしていきます。

文化庁所蔵

# 古代出雲文化フォーラムⅢ

Forum on Ancient Izumo Culture

文化庁所蔵

## 「くにびき神話」と古代出雲・伯耆の成り立ち

**平成27年**
**3月8日日**
13:00〜16:00

**大阪国際会議場**
（グランキューブ大阪）10F会議場
大阪市北区中之島5丁目3-51

**定員** 1,000名
**参加費** 無料
**参加には事前のお申込みが必要です。**

主催：島根大学

青戸 慧 作「大国主命と白兎」 加納美術館所蔵

荒神谷遺跡出土状況 文化庁所蔵

加茂銅鐸 文化庁所蔵

プログラム 司会／石原 美和（元TSKアナウンサー）

**第1部 シンポジウム（13:10〜14:40）**
コーディネーター 會下（えげ） 和宏 島根大学ミュージアム准教授

趣旨説明
**野村 律夫**「くにびきジオパーク」
島根大学教育学部教授・島根大学くにびきジオパークプロジェクトセンター長・島根大学汽水域研究センター長

1
「地質学的にみた古代出雲世界の舞台〜島根半島・ラグーン（宍道湖・中海）の形成〜」
**入月（いりづき） 俊明**
島根大学総合理工学研究科教授・島根大学ミュージアム館長

2
「考古資料が物語る古代出雲成立以前の朝鮮半島と山陰」
**平郡（ひらごおり） 達哉**
島根大学法文学部准教授

3
「東アジア世界の中の古代出雲—「国引き神話」・新羅・渤海—」
**大日方（おびなた） 克己**
島根大学法文学部教授

4
「『出雲国風土記』と遺跡からみる広域交流」
**大橋 泰夫**
島根大学法文学部教授・島根大学古代出雲プロジェクトセンター長

**第2部 鼎談（15:00〜16:00）**
**小林（しょうたい） 祥泰** 島根大学学長
**千家（せんげ） 和比古（よしひこ）** 出雲大社権宮司
**石原 美和**

お問い合わせ先●
島根大学総務部総務課 TEL 0852-32-6014 FAX 0852-32-6019 E-mail forum@office.shimane-u.ac.jp
（〒690−8504 島根県松江市西川津町1060）

http://www.shimane-u.ac.jp 島大 検索